

E-4

「～のお持ち {の／でない} 方」という表現について －「お+動詞連用形」の捉え方をめぐって－

森 貞
(福井工業高等専門学校)

要旨

「ガ・ノ交替」(主格・属格交替)現象に関する先行研究は多いが、「ヲ・ノ交替」(対格・属格交替)に関しては、そもそも、一般的に交替現象として認められていないために先行研究の数も限られている。本稿では、①「NP1のNP2」はNP1を参照点(Reference Point)、NP2をターゲット(Target)とする参照点構造(Langacker(1993))を言語化したものであること(尾谷昌則(1998))、②landmark(日本語では「を」格目的語が相当)も(認知の仕方次第で)参照点の地位を得ることができること(Langacker(2008))、を理論的根拠として、「ヲ・ノ交替」現象が存在することを主張する。「～のお持ち {の／でない} 方」という表現は、「お持ち」(お+動詞連用形)、あるいは「お持ち {の／でない} 方」がNP2として捉えられた場合に、その生成(容認)が可能になることが、言語感覚調査結果の統計的分析を通して主張される。小熊(2007a)流に表現するならば、「～をお持ち {の／でない} 方」は tr/lm 認知(trajector/landmark 認知)を反映した連体修飾構文であり、「～のお持ち {の／でない} 方」は R/T 認知(Reference Point/Target 認知)を反映した連体修飾構文である。

1. はじめに

日本語においては、他動性制約一対(象)格助詞「を」を伴う直接目的語が連体修飾節に顕在すると主格を属格に交替できなくなる現象(Harada(1971)、Watanabe(1996))が生じている場合((1b))を除き、連体修飾節中の主格助詞「が」を「の」に置き換えることが可能であると指摘されている(いわゆる「ガ・ノ交替」)(菊田(2002)、小熊(2004)、小熊(2007a)、Koguma(2007b))。

(1) a. [あつし{が／の}書いた]絵

b. [あつし{が／*の}絵を書いた]部屋

また、可能文(「～れる・られる」)では、直接目的語の格表示として、「を」の他に「が」を使用することができる(青木(2008)、中村(2000))ことから、(ガ・ノ交替により)「の」の使用が可能である。

(2) a. [フランス語{を／が}話せる]さとし

b. [フランス語の話せる]さとし

(3) a. [フランス語{を／*が}話す]さとし

b. *[フランス語の話す]さとし

では、「～をお持ち {の／でない} 方」に較べると明らかに使用例の数は少ないが、実例が存在する。「～のお持ち {の／でない} 方」という表現における直接目的語表示の「の」の生起にはどのような(認知的)メカニズムが関与しているのであろうか(当然のことであるが、上記の「ガ・ノ交替」は適用できない(e.g. *「～がお持ち {の／でない} 方」))。

表 1: 国会会議録検索システム[平成元年～令和 2 年分]の検索結果

	～ {を／の} お持ちの方	～ {を／の} お持ちでない方
「を」が生起している実例数	1883 (99.7%)	46 (97.9%)
「の」が生起している実例数	6 (0.3%)	1 (2.1%)
合計	1889 (100%)	47 (100%)

(4) だから、今後、地域社会において特定の技能のお持ちの在留資格を持っている外国の方を受け入れるというのは、これは一つの意義あることだと思いますが、実際同じ地域で、文化や行動様式が全く我々と異なっているわけなので、こういう方々と一緒に暮らすにはどうしたらいいかと。

(第 198 回国会 参議院 法務委員会 第 7 号 平成 31 年 4 月 16 日)

- (5) 旅券のお持ちでない方については在留資格証明書に証印を押してそれを証印ということで交付する代わりに交付すると、こういうことになっております。

(第154回国会 参議院 法務委員会 第2号 平成14年3月19日)

本稿では、「お+動詞連用形」に着目し、この表現の捉え方(名詞として捉えているか、動詞として捉えているか)の違いが、「の」の生起(容認可能性)の可否に関与している可能性が高いことを主張する。2節では、実例を提示する。3節では、仮説を提示する。4節では、言語感覚調査の結果を統計分析し、仮説の妥当性を検証する。5節は、まとめである。

2. 実例提示

本節では、「～の【お+動詞連用形】{(a)の / (b)になる}～」の実例を提示する。

- (6) a. 本のお売りの際は、地元神奈川県の古本屋にご依頼ください。神奈川県内は全て無料で出張致しますよ。
(しましまブックスグループ)
- b. はじめて金・貴金属のお売りになる場合はご注意ください。
(ゴールドミセス)
- (7) a. フィルムカメラのお探しのお客様!キタムラのネット中古はいかが?
(カメラのキタムラ)
- b. この小中学校を目指して不動産のお探しになられる親御様も多い程の、人気の小中学校区なので
(ランドステージ)
- (8) a. おタバコのお吸いのお客様は玄関横にある喫煙コーナーをご利用ください。(うぐいすの初音(宿))
- b. 今は煙草のお吸いになる御仁は肩身が狭く、周りに気を使いながら吸っています。お煙草のお吸いにならない方のご相談下さい。
(京都烏せゑ 札幌本店)
- (9) a. エコウィルのお使いの方
(東京ガス)
- b. 本電動トレッドミルのお使いになる前に必ず取扱説明書をよくお読みください。
(Circle Treadmill M8 LED オーナーズマニュアル)
- (10) a. ほかの施設へのご入居のお待ちの方は、当施設で憩いのひと時をお過ごしください。
(住宅型有料老人ホーム あんじゅ宿)
- b. ショールームには点検のお待ちになっているお客様が退屈されないよう本棚をご用意しております!
(プジョー名古屋中川)
- (11) a. 日進市内にお住まいの視覚障害者、視覚による表現の認識に障害のお持ちの方に録音図書・点字図書の貸出を行います。
(日進市立図書館)
- b. 当院では誕生日検診を行っております。お知らせのハガキのお持ちになられた方には患者さんに合った歯ブラシを差し上げます。
(林歯科医院)

3. 仮説提示

仮説の提示にあたって、まず、「(ガ・ノ交替)に関する」先行研究においてしばしば言及されている「参照点構造(モデル)」(Langacker(1993))を紹介する。

- (12) Let us look at a **reference-point model** introduced by Langacker (1993), which is based on the **reference-point ability**. According to Langacker (2008), “We have the ability to invoke the conception of one entity in order to establish ‘mental contact’ with another. The entity first invoked is called a **reference point**, and one accessed via a reference point is referred to as a **target**. A particular reference point affords potential access to many different targets. Collectively, this set of potential targets constitutes the reference point’s **dominion**. (83-84)” The essential elements of the reference-point ability are comprised in the reference-point model depicted in Figure 4-9.

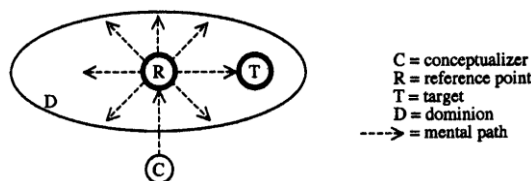


Figure 4-9: Reference Point Relationship (Langacker 2008:84)

The model sketched in Figure 4-9 illustrates that the conceptualizer (C) accesses the target (T) via the reference point (R). The dashed arrows indicate mental path which the conceptualizer follows in accessing the target. The ellipse labeled D represents the dominion, which is constituted by the set of potential targets of the reference point. (Mori (2009: 45-46))

尾谷(1998)では、(13)に示すように、格助詞「の」のスキーマ的意味を、参照点構造を構築する「認知的手掛かり」(参照点構造の構成要素)として規定している。

(13) 格助詞「の」の意味

認知プロセス(スキーマ的意味)・・・「認知的手掛かり」(参照点)

プロトタイプ事例的意味……………「所有」「主格」「同格」など (尾谷(1998: 18))

そして、(14)に示すように、「NP₁のNP₂」はNP₁を参照点(R)、NP₂をターゲット(T)とする参照点構造 [R—▶T] (—▶は mental path) を言語化したものであると規定している。

(14) 「NP₁のNP₂」という構造は、本稿がこれまで検討してきた格助詞「の」の参照点構造そのものである。逆を言えば、「NP₁のNP₂」と解釈できる場合にしか「ガ・ノ交替」が起こらないのであるから、「NP₁のNP₂」という参照点構造になっている場合にしか「ガ・ノ交替」が起こらないということでもある。 (尾谷(1998: 25))

小熊(2007a)では、「の」格(主語)連体節、「が」格(主語)連体節は、それぞれ、R/T認知、tr/lm認知を反映した連体修飾構文であることが主張されている。

(15) 「の」格連体節とは連体節内主語を参照点として標的である被修飾名詞を同定する参照点関係をベースにR/T認知(Reference-Point/Target認知)を反映した連体修飾構文であり、この意味構造が改めてtr/lm認知(trajector/landmark認知)で捉え直されたものが「が」格連体節である。

(小熊(2007a: 60))

ここで、注目すべき点は、(16)に示すように、trajector(primary focal participant)だけでなく、landmark(secondary focal participant)もreference pointとして「捉える」ことが可能なことである。

(16) The subject of a clause is a nominal that elaborates the trajector of the process it designates. I am now suggesting that the trajector of a profiled relationship, previously described as its primary focal participant, can also—and more fundamentally—be characterized as a reference point with respect to it. Similarly, an object elaborates the landmark of a profiled relationship, previously described as its secondary focal participant. By analogy, then, a relation's landmark can be characterized as a secondary reference point with respect to it. These notions are hardly self-explanatory, but when properly understood they prove both psychologically plausible and linguistically revealing. (Langacker (2008: 517))

これに加えて、もう一つ注目すべき点は、「お+動詞連用形」を名詞として扱うことができることである。

(17) 「遊ぶ」は動詞ですが、「いろんな”遊び”がありますね」の「遊び」は名詞です。これを動詞連用形の名詞化といいます。「お」「ご」を付けることで、通常は名詞化されないような動詞(開ける、切る、など)も名詞として扱うことができます。 (遠入 2018)

ここで重要なのは、①「NP₁のNP₂」はNP₁を参照点、NP₂をターゲットとする参照点構造を言語化したものであること、②landmark(「を」格目的語)も(認知の仕方次第で)Reference Pointの地位を得ることができること、③「お+動詞連体形」を名詞として扱うことができること、の3点を勘案した場合、「お+動詞連用形」が名詞として認識(解釈)されると、「の」によるR/T認知を反映することができる構造(「NP₁—▶NP₂」の構造)の(心的世界における)構築が可能になることである。

以上の考察から、下記の仮説が立てられる。

(18) 「～のお持ち{の/でない}方」は、お持ち(お+動詞連用形)が名詞として捉えられている場合に、生成され得る(容認され得る)表現であり、『お+動詞連用形』が動詞として捉えられている場合は、対(象)格表示に、「の」ではなく「を」が用いられる。

上記の仮説が正しいとすると、(19)の「旅券をお持ちの方」では、「お持ち」は動詞(profiled relationshipの仲立ち)として捉えられており、それによって促進されるtr/lm認知が、直接目的語を「を」格(「旅券」はlandmarkとして認識されている)で表示し、他方、「旅券のお持ちでない方」では、「お持ち」

を名詞(profiled entity)として捉えることで、「NP1 → NP2」の構造が立ち上がり、それによって促進される R/T 認知が、直接目的語を「の」格（「旅券」は reference point として認識されている）で表示していると想定することができる。

(19)これは、証印は、一般論で申し上げますと、旅券をお持ちの方は旅券に押すことになっておりまして、旅券をお持ちでない方については在留資格証明書に証印を押してそれを証印ということで交付する、代わりに交付すると、こういうことになっております。

(第 154 回国会 参議院 法務委員会 第 2 号 平成 14 年 3 月 19 日)

4. 言語感覚調査

本節では、言語感覚調査(被験者:工業高等専門学校 3・4 年生、被験者数:168 名、実施方法:Microsoft Forms)の結果を元に、3 節で提案した仮説の妥当性を検証する。

(20) a.小銭のお持ちでない方は、お早めに両替をお願いいたします。(乗車したバスの運転手の発言)

b.小銭の持っていらっしやらない方は、お早めに両替をお願いいたします。(同上)

表 2 : (20a)と(20b)のクロス集計

	(20a)○	(20a)?	(20a)*	(20b)合計
(20b)○	33 (19.6%)	3 (1.8%)	0 (0%)	36 (21.4%)
(20b)?	57 (33.9%)	39 (23.2%)	2 (1.2%)	98 (58.3%)
(20b)*	16 (9.5%)	9 (5.4%)	9 (5.4%)	34 (20.2%)
(20a)合計	106 (63.1%)	51 (30.4%)	11 (6.5%)	168 (100%)

(21)・[a○-b○]+[?・?]+[*・*] ・[○-?]+[○-*]+[?・*] ・[?・○]+[*・○]+[*・?]

【81(46.2%)】

【82(48.8%)】

【5(3.0%)】

(21)を見ると、(20a)に較べて(20b)の容認性判断が下がっている被験者の割合が、48.8%に上ることから、このグループに属する被験者は、(20a)の「お持ち」を名詞として捉えることで、参照点構造を構築し、R/T 認知を発動している (R/T 認知の追体験) のに対して、(20b)では、R/T 認知が発動しにくい状況になっていることが推定される。但し、(20b)を容認可能 (○) と判断する被験者も 21.4%いることから、このグループに属する被験者は何らかの形で R/T 認知を追体験していると考えられる。

(22) a.前売り券のお持ちの方は、こちらからご入場ください。(コンサートの入場係員の発言)

b.前売り券のお持ちになられている方は、こちらからご入場ください。(同上)

c.前売り券の持っていらっしやる方は、こちらからご入場ください。(同上)

表 3 : (22a)と(22b)のクロス集計

	(22a)○	(22a)?	(22a)*	(22b)合計
(22b)○	41 (24.4%)	1 (0.6%)	0 (0%)	42 (25.0%)
(22b)?	55 (32.7%)	35 (20.8%)	0 (0%)	90 (53.6%)
(22b)*	14 (8.3%)	12 (7.1%)	10 (6.0%)	36 (21.4%)
(22a)合計	110 (65.5%)	48 (28.6%)	10 (6.0%)	168 (100%)

(23)・[a○-b○]+[?・?]+[*・*] ・[○-?]+[○-*]+[?・*] ・[?・○]+[*・○]+[*・?]

【86(51.2%)】

【81(48.2%)】

【1(0.6%)】

(23)を見ると、(22a)に較べて(22b)の容認性判断が下がっている被験者の割合が、48.2%に上ることから、このグループに属する被験者は、(22a)の「お持ち」を名詞として捉える傾向が強いものに対して、(22b)の「お持ち」に対してはその傾向が弱いことが推定される。これは、「お持ちの」と「お持ちになられている」を較べると、後者の方に動詞性 (他動性) がより強く感じられるためであろうと思われる。

表 4 : (22a)と(22c)のクロス集計

	(22a)○	(22a)?	(22a)*	(22c)合計
(22c)○	44 (26.2%)	2 (1.2%)	1 (0.6%)	47 (28.0%)
(22c)?	48 (28.6%)	33 (19.6%)	0 (0%)	81 (48.2%)
(22c)*	18 (10.7%)	13 (7.7%)	9 (5.4%)	40 (23.8%)
(22a)合計	110 (65.5%)	48 (28.6%)	10 (6.0%)	168 (100%)

(24)・[a○-c○]+[?・?]+[*・*] ・[○・?]+[○・*]+[?・*] ・[?・○]+[*・○]+[*・?]
【86(51.2%)】 【79(47.0%)】 【3(1.8%)】

(24)を見ると、(22a)に較べて(22c)の容認性判断が下がっている被験者の割合が、47.0%に上っている。これは、「お持ち」を名詞として捉えることが可能であるのに対して、後者ではその可能性がないことに起因していると思われる。ただ、(22c)を容認可能(○)と判断した被験者が28.0%おり、このグループに属している被験者がどのようにR/T認知を発動しているか(R/T認知を追体験しているか)を探る必要がある。

表5：(22b)と(22c)のクロス集計

	(22b)○	(22b)?	(22b)*	(22c)合計
(22c)○	25 (14.9%)	20 (11.9%)	2 (1.2%)	47 (28.0%)
(22c)?	16 (9.5%)	56 (33.3%)	9 (5.4%)	81 (48.2%)
(22c)*	1 (0.6%)	14 (8.3%)	25 (14.9%)	40 (23.8%)
(22b)合計	42 (25.0%)	90 (53.6%)	36 (21.4%)	168 (100%)

(25)・[b○-c○]+[?・?]+[*・*] ・[○・?]+[○・*]+[?・*] ・[?・○]+[*・○]+[*・?]
【106(63.1%)】 【31(18.5%)】 【31(18.5%)】

(25)を見ると、(22b)に較べて(22c)の容認性判断が下がっている被験者の割合と、逆に容認性判断が上がっている被験者の割合が同じである。このことから、「お持ちになられている」では、「お持ち」を名詞として捉える被験者と名詞として捉えない(動詞として捉える)被験者の割合が拮抗していると考えられる。また、(22b)を容認可能(○)とする被験者の割合(25.0%)と(22c)のそれ(28.0%)に大きな差がないことから、R/T認知におけるターゲット(NP2)として「…方」を候補に挙げざるを得ない。

- (26) a.本案内状のお読みの方は、期日までに、参加の可否をお知らせください。(主催者発信メール)
 b.本案内状のお読みになられた方は、期日までに、参加の可否をお知らせください。(同上)
 c.本案内状の読まれた方は、期日までに、参加の可否をお知らせください。(同上)

表6：(26a)と(26b)のクロス集計

	(26a)○	(26a)?	(26a)*	(26b)合計
(26b)○	45 (26.8%)	35 (20.8%)	8 (4.8%)	88 (52.4%)
(26b)?	25 (14.9%)	34 (20.2%)	4 (2.4%)	63 (37.5%)
(26b)*	4 (2.4%)	6 (3.6%)	7 (4.2%)	17 (10.1%)
(26a)合計	74 (44.0%)	75 (44.6%)	19 (11.3%)	168 (100%)

(27)・[a○-b○]+[?・?]+[*・*] ・[○・?]+[○・*]+[?・*] ・[?・○]+[*・○]+[*・?]
【86(51.2%)】 【35(20.8%)】 【47(28.0%)】

(27)を見ると、これまでと違って、(26a)よりも(26b)のほうが容認可能性が高いと判断する被験者の割合(28.0%)が、(26b)よりも(26a)のほうが容認可能性が高いと判断する被験者の割合(20.8%)を上回っている。これは、文脈から判断すると、案内状の『読了』という読みが要求される場面であるが、(26a)の「お読みの方」では、その読みに至る負荷(手間)が、より明示的な「お読みになられた方」に較べて大きいからであろうと推測される(逆に言えば、後者の方が、負荷が(少)ないということである)。

表7：(26a)と(26c)のクロス集計

	(26a)○	(26a)?	(26a)*	(26c)合計
(26c)○	37 (22.0%)	28 (16.7%)	5 (3.0%)	70 (41.7%)
(26c)?	28 (16.7%)	38 (22.6%)	9 (5.4%)	75 (44.6%)
(26c)*	9 (5.4%)	9 (5.4%)	5 (3.0%)	23 (13.7%)
(26a)合計	74 (44.0%)	75 (44.6%)	19 (11.3%)	168 (100%)

(28)・[a○-c○]+[?・?]+[*・*] ・[○・?]+[○・*]+[?・*] ・[?・○]+[*・○]+[*・?]
【80(47.6%)】 【46(27.4%)】 【42(25.0%)】

(28)を見ると、(26a)よりも(26c)のほうが容認可能性が低いと判断する被験者の割合(27.4%)と(26a)よりも(26c)のほうが容認可能性が高いと判断する被験者の割合(25.0%)が拮抗している。これは、(26a)の「お読み」を名詞として捉えることで、R/T認知の追体験をしている被験者と、「読了」の読みに伴う負荷

(手間)を避けて、(26c)でNP₂に「…方」を割り当てて、R/T 認知の追体験をしている被験者が混在していることを推定させる。

表 8 : (26b)と(26c)のクロス集計

	(26b)○	(26b)?	(26b)*	(26c)合計
(26c)○	48 (28.6%)	16 (9.5%)	6 (3.6%)	70 (41.7%)
(26c)?	34 (20.2%)	38 (22.6%)	3 (1.8%)	75 (44.6%)
(26c)*	6 (3.6%)	9 (5.4%)	8 (4.8%)	23 (13.7%)
(26b)合計	88 (52.4%)	63 (37.5%)	17 (10.1%)	168 (100%)

(29)・[b○-c○]+[?-?]+[*-*] ・[○-?]+[○-*]+[?-*] ・[?-○]+[*-○]+[*-?]
【94(56.0%)】 **【49(29.2%)】** **【28(16.7%)】**

(29)を見ると、(26c)よりも(26b)のほうが容認可能性が高いと判断する被験者の割合(29.2%)が、(26b)よりも(26c)のほうが容認可能性が高いと判断する被験者の割合(16.7%)を上回っている。これは、「お読み」を名詞として捉えることで R/T 認知を追体験する被験者の割合が高いことを予想させる。

以上の考察から、「お+動詞連用形」を名詞として捉えることで R/T 認知 (の追体験) が促進される可能性があることが明らかになった。その一方で、連体修飾節中における「お+動詞連用形」の顕現の有無にかかわらず、顕現している場合と顕現していない場合の両方を容認可能 (○) とする被験者が存在することを勘案すると、「お+動詞連用形」を名詞として捉えるのではなく、『の』からの連体修飾節+方」全体を NP₂ と見なして R/T 認知 (の追体験) を行っている可能性を排除することはできない。

したがって、「～のお持ち {の/でない} 方」の表現における「の」格目的語の生成 (容認) には、以下の 2 種類の認知プロセス(R/T 認知)のいずれかが関与していると想定するのが妥当であろう ((30b)は「～の読まれた方」のような表現が容認される場合の認知プロセスでもある)。

(30) a. [直接目的語] (NP₁(R)) の [お+動詞連用形] (NP₂(T)) {の/でない} 方
 (この場合、「お+動詞連用形」は名詞として捉えられている)

b. [直接目的語] (NP₁(R)) の [お+動詞連用形 {の/でない} 方] (NP₂(T))

本稿では、連体修飾構文を扱っているが、「お+動詞連用形」を名詞として捉えることができるということは、連体修飾構文以外の場合にも、「NP₁—▶NP₂」の構造の認識が「を」から「の」への交替を可能にするはずであるが、そうはならない。

(31) (美術作家に対する発言)

a. 独特の感性 {を/*の} お持ちになっていないと、このようなすごい作品は作れませんね。

b. このようなすごい作品は、独特の感性 {を/の} お持ちになっている先生にしか作れませんね。

このことから、「ヲ・ノ交替」は連体修飾構文に限られ、したがって、(30a)は(30b)の認知プロセスを促進 (補強) する役割を果たすものとして位置づける必要があるかもしれない。

ところで、(30)の想定が正しいものであるとすると、例えば、(33a)(33b)のいずれかが起動すれば、(32)において容認不可能とされる(60b)も容認可能になることが予想される。

(32) この交替が許されるのは、「が」が節レベルの参照点として機能しているからである。ゆえに、同じ目的格であっても「を」格でしか表現できない目的格の場合は「の」で交替できない。この原因は、やはり「を」に参照点機能がないからであると考えられる。

(60) a. 英語を勉強している青年 b. *英語の勉強している青年 (尾谷 (1998:26))

(33) a. [英語] (NP₁(R)) の [勉強] (NP₂(T))している青年 (「勉強」を名詞として捉えている場合)

b. [英語] (NP₁(R)) の [勉強している青年] (NP₂(T))

(34) 現在、香港中文大学交換留学で専門科目や英語、中国語の勉強している学生や、カナダ、中国、韓国での語学留学プログラムに参加している学生がリアルタイムで更新中です。

(名古屋商科大学 国際学部 留学ブログ)

(35) 現在独学で韓国語の学習している高校 3 年生の皆さん、一緒に韓国留学を目指してみませんか。

(城西国際大学 国際人文学部 国際文化学科 NEWS)

但し、例えば、「英語の学ぶ学生」と「英語の学んでいる学生」を較べた場合、前者は×、後者は○ (筆者の言語感覚による) と判断が変わるように、他動詞の形態によって、容認性判断が異なることに注意

をする必要があるように思われる。ここでは詳細に論じるだけの紙面は残されていないが、形態の差異が「他動性」(tr/lm 認知を発動させる要因)の強弱に影響を与えていることが予想される。

5. おわりに

本稿では、「～のお持ち {の／でない} 方」という表現における「の」格(対格)目的語の生成に関わる認知プロセスの同定を試みた。2節では、同表現の実例を列挙し、広範に使用されていることを確認した。3節では、先行研究を概観し、①「NP₁のNP₂」はNP₁を参照点、NP₂をターゲットとする参照点構造を言語化したものであること、②landmark(「を」格目的語)も(認知の仕方次第で)Reference Pointの地位を得ることができること、③「お+動詞連体形」を名詞として扱うことができること、の3点を確認した上で、【「～のお持ち {の／でない} 方」は、お持ち(お+動詞連用形)が名詞として捉えられている場合に、生成され得る(容認され得る)表現であり、『お+動詞連用形』が動詞として捉えられている場合は、対(象)格表示には、「の」ではなく「を」が用いられる。】という仮説を提案した。4節では、言語感覚調査結果の統計的分析を通して、上記の仮説を一部修正し、「～のお持ち {の／でない} 方」の生成(容認)には、(a) [直接目的語] (NP₁(R)) の [お+動詞連用形] (NP₂(T)) {の／でない} 方(この場合、「お+動詞連用形」は名詞として捉えられている)、(b) [直接目的語] (NP₁(R)) の [お+動詞連用形 {の／でない} 方] (NP₂(T))、のいずれかの認知プロセス(R/T認知)が関与している可能性が高いことを提案した(前者が後者の認知プロセスを促進(補強)する役割を果たしている可能性にも言及した)。そして、連体修飾節に「お+動詞連用形」が顕現していないにもかかわらず、「の」格目的語の生起(容認)が可能である場合は、(b)の認知プロセスが関与している可能性が高いことにも言及した。但し、他動詞の形態によって、生成の可否(容認性判断)に差異が生じる点には留意が必要である。この点に関しては、稿を改めて、論じたいと思う。

主要参考文献

- 青木ひろみ (2008) 「可能表現の対象格標示『ガ』と『ヲ』の交替」、『世界の日本語教育』18, pp.133-146, (国際交流基金).
- 馬場俊臣 (1996) 『小銭のお持ちでない方』をめぐって: 『文法』と『説明』, 『札幌国語研究』1, pp.15-20, (北海道教育大学).
- 遠入のどか (2018) 『敬意を込めて敬語を使うための敬語教室』(インターネットホームページ)
- 藤村逸子 (2009) 「他動性再考: 『被動作主』を表示する『が』と『を』の交替」 *Asian and African Studies* XIII, 1, pp.73-102.
- Harada, Shin-ichi (1971) "Ga-no conversion and idiolectal variation in Japanese," 『言語研究』60, pp.25-38, (日本言語学会).
- 菊田千春 (2002) 「が・の交替現象の非派生的分析: 述語連体形の名詞性」, 『同志社大学英語英文学研究』74, pp.93-136.
- 小熊 猛 (2004) 「いわゆる『が・の』交替の認知的再考」, 『日本認知言語学会論文集』4, pp.381-391.
- 小熊 猛 (2007a) "Nominative-Genitive Conversion in Japanese: A Cognitive Grammar Approach," 『金沢大学大学院社会環境科学研究科博士論文要旨』, pp.57-61.
- Koguma, Takeshi (2007b) *Nominative-Genitive Conversion in Japanese: A Cognitive Grammar Approach*. (未公刊博士論文(金沢大学)).
- Langacker, Ronald W. (1993) "Reference-point Constructions," *Cognitive Linguistics* 4(1), pp.1-38.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: An Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Mori, Sadashi (2009) *The NEG-Raising Phenomenon: A Cognitive Linguistic Approach*. (未公刊博士論文(金沢大学)).
- 中村裕昭 (2000) 「可能構文における格交替現象について」『日本語科学』7, pp.133-144.
- 尾谷昌則 (1998) 「格助詞『の』の認知プロセス」, 『言語科学論集』4, pp.16-33, (京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座).
- Watanabe, Akira (1996) "Nominative-genitive conversion and agreement in Japanese: A cross-linguistic perspective," *Journal of East Asian Linguistics* 5, pp.373-410.